かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

初代会長の墓は、舅·姑の上原佐吉·八重の墓の傍らにある。佐吉の墓石は、「わしに刻ませてくれ」と東大教会の初代会長·上原佐助氏が懇望した。

朝日只射すまぶしらに、夕日柔らに茜にそまる山辺を永遠の奥都城として、上原さと、上原佐吉、上原八重の墓石はひっそりと佇んでいる。

一年間を通しておぢばを賑やかにしよう

立教169年 2月号

1．毎月一千人のおぢばがえり

1．五十万軒にをいがけとおさづけの取次

表紙のことば

「備佐」の商いの規模について、調べた事がある。公的書類には載っていない。府立図書館でふと目にした書類があった。昭和45年頃の事である。題名は「畳表商沿革史」。明治35年編纂の和綴じの物で、貴重本の書棚にあった。これは大阪市に於ける明治30年前後までの畳表商問屋について記した文書であるが、この頃、畳表問屋商規則では、一般の信用を厚くし取引規約を確守履行する証として、各問屋に信認金と称する積立金を行う事になっていた。これは、各問屋の資本力を表現したものと言ってよいと思う。これによれば、備佐こと上原佐助は、壱級弐等に属し、当時(明治12年10月)の大阪市内の34の問屋の中、上位十番内にランクされている。明治12年10月といえば、既に備佐の商いはかなり苦しくなっていた頃で、それから推して考えると、全盛時の資本力は、商都・大阪で有数のものであったと思う。この当時の備佐の商い高は年間十万両(推定換算値約十五億円)にも及んだ。佐吉は後年、この頃を振り返って「金はできる時には湧くように出来る」とも言ったが、さととの話で、「おさと、備佐の身代はな、三十人や五十人の人が毎日寝て食うたとて、ピリッともしやせんで・・・」とも話した。又毎年6月、土用の晴天の日々には、土蔵の入口に内から錠をかけて、佐吉・八重が弁当持で金札の虫干しをするのが習慣になっていた、という。この頃の事であろう、大阪の天神祭は、神輿が海へ渡御するので、大伝馬、小伝馬など各種の船に装飾を凝らして乗り込み、見物に繰り出すのであるが、備佐の船乗込は、一際目を引くものがあったという。

こうした上原家が入信したのは大阪に不況の嵐が吹き荒れた明治13年の事である。正月、床屋で佐助が話を聴き、その後一家揃って心斎橋筋の佐吉の隠居所に集い、天恵組から信仰していた石塚松治郎氏を伴って床駒・安藤駒吉氏が訪れた。話を聴いて、一際信心深い佐吉とさとが感激し、一家は入信した。以来上原家では、月三回の講づとめをしている。当日は家の前には多くの幟をたて、天恵組の人達のみならず、真明組、明心組の人々、あるいは商人仲間さえ招き、酒肴を出して華やかであった。またおぢばからはその時々に中山真之亮様をはじめ、仲田儀三郎、高井直吉氏、あるいは飯降伊蔵氏、鴻田利吉、辻忠作、桝井伊三郎、山本利三郎、岡田與之助などの各氏が来訪された。明治17年9月、天恵組三番の信者・竹内未誉至が中心となって、大日本天輪教会の設立が計画され、天恵組、真心組、その他大阪の講元が協力した中で、上原家は北炭屋町の教会家屋の新築、更には上棟式に多数の米穀を寄進し、炊出しをしたりして、人々の結束に尽力した。上棟式の餅だけでも、大変なものであった。上原家の当主・佐助は後、東京で東大教会を設立するが、当時、外出の時には、太鼓腹の脇に、銀時計を挟んで太い銀鎖をぶら下げ、おぢば帰りにも備佐お抱えの人力車で行った。その後の備佐の没落、又上原家の大阪、笠岡での歩みについては、既に誌したところである。上原家が世界救けの一翼を担って中国地方の笠岡の地に明治二十四年、教会を設け一筋に邁進する事になったのは、一重に笠岡の名称の初代会長に任じられた上原さとの教祖を想い慕う、ひたぶるな心にある。さとによって、上原家は大阪の豪商からよふぼくに生まれ変わったのである。私達後に続く者は、この事を肝に深く命じなければならない。そしていつの時代にあっても、どのような困難の中にあっても、初代が通ってくれた困苦の道に照らして、歩みたいものである。初代の墓は大教会の墓地にある。朝日只射すまぶしらに、夕日柔らに茜にそまる山辺を永遠の奥都城として、上原さと、上原佐吉、上原八重の墓石はひっそりと佇んでいる。

（史料部長　上原繁道）

春季大祭講話

今日は教祖百二十年祭の年祭の年の春季大祭と言うことでございますので、今この時にあたりまして思いますところ、しばらくの間お話をお取り次ぎをさせて頂きたいと思います。

年頭に当たりまして、真柱様から親しくお言葉を頂戴を致しました。年頭会議で、年頭のご挨拶がございますが、例年ならば、明けましておめでとうございますと言う祝辞から、新年のご挨拶から始まりますが、この年祭の年だけ、そのお言葉がございません。昨日も大教会で年頭会議をさせて頂いて、その真柱様のテープを流させて頂きまして、共々に聞かせて頂きましたけれども、立教百六十九年の新年を迎えることができました、とご挨拶を頂いただけで、おめでとうございますと言うご挨拶は、ございませんでした。一体これはどういう事なのかなあと、改めて思案させて頂くんですが、明治二十年に教祖が御身をお隠しなされたという事はもう皆様方よくご存知の事であります。これは、明治二十六年に至るまで、いわゆる教祖と当時お側におられた先生方、真柱様はじめ本席飯降伊蔵先生、また、お側におられた先生方、との壮絶なと言いますか、いわゆるバトルと言うてもいい位の壮絶な教祖とお側の先生方の間でやり取りがあったわけでありますが、それは陽暦で言えば明治二十年の正月一日、と言う形になりますが、その当時まだ陰暦の方が強かったわけでありますね、陰暦で言えば十二月八日に教祖がお風呂場でよろめかれて、「これは世界の動くしるしや」というところから、段々に教祖の身上が重くなってきたと言うことで、当時の先生方は、このままではどうなってしまうんだろうかと、この教祖の御身の身上なんとかご守護頂きたい、ということで、教祖と先生方の話があったわけであります。常々教祖は百十五歳定命と言うことを仰っていますし、それまでは必ず教祖はお元気で私たちをお導き下さるんだと言う思いが強かったでしょうから、それが、十二月の初めによろめかれてから段々段々に身上が悪くなってくる。これも九十歳、御年考えれば、今からもうすぐ亡くなってもおかしくはないと、人間の思案からいけばそうであるけれども、しかしながら、百十五歳までは生きてちゃんと私たちを導いてくれるだろう、という思いもありつつも、一方では何時逝ってもおかしくないなあという不安の思いもあったんではなかろうかな。その中で、つとめをせねばならん、いや、つとめはしたい、なんとしてでもおつとめはさせて頂きたいけれども、つとめをしたならば警察がやって来て、自分たちが苦労するならばいざ知らず、一番大事な大事なそれこそ身上であるところの教祖にご迷惑がかかる。自分たちがただ苦しいだけならば、警察に引っ張って行かれて石棺するだけならば、我慢もし、おつとめもさせて頂きますけれども、本当に段々御身上が悪くなっている教祖さえも引っ張っていかれる。そうでなくても心配なのに、なかなかつとめたくても教祖を思えば、つとめたくてもつとめられない、何とも言えない心の葛藤なんでしょうね。先ほど申しました様に、今では年末年始やと言うて賑やかにしておるけれども、その当時は何もありません、それこそ教祖の御身のことしか頭になくて、それこそ、年末年始も感じる暇もなかったんではないんだろうか。教祖は御身の上からつとめをせい、つとめをせい。させて頂きたいのは、山々ですけれども…。という何とも言えない心の葛藤の中で、年末年始を迎えられた。それこそ正月さえも感じることが出来なかったと言うのが当時の先生方の偽らざる思いではなかったんだろうかなあと

思うんでありますね。私たちは何気なく春の大祭、十年毎の年祭も春の大祭やから、お祝いとしてやったら良いやないか、と言う様な思いがします。しかしながら、当時の先生方はそうではなかった。明治二十年その当時の先生方の思いを考えれば、明けましておめでとうございますと言う様な、お祝いの言葉にはなかなか言い難いという思いも、真柱様の思いとしては強いものがあるんではなかろうかな、と言うふうに思うんであります。ですから、毎年の年頭のご挨拶にはちゃんと、ただ普通の春季大祭の時には明けましておめでとうございますと言うことは、言われるんです。しかし、教祖年祭には、そういうふうに言われないということは、改めて明治二十年の当時の先生方の思いを思んばかれば、そう思えば思うほど、当時の先生方は、本当に言うに言われないような思いで教祖と接し、おつとめというものも、本当に命がけのおつとめというものをしておられたんだなあ。そう思えば、新年を迎えましたということは言えても、新年を迎えたお祝いということは、言えないというのが偽らざる心情ではないのかな、改めて思わせて頂きます。決して私たちがそういう思いになれという事では、決してございませんが、真柱様の思いというものは、私たちもしっかりくみ取らせて頂いて、年祭に向けての思いというものは、ただ単に毎年の春季大祭に向けての思いとは大きく違ってくるんだと、しかりとその当時の先生方の苦労を我が苦労とさせて頂けるような、年祭に向けての歩みというものはやはりつとめさせて頂かなければ申し訳ない。真柱様の思いに本当に応えさせて頂くというようなつとめ向きには至らないと、やはりしっかり思案させて頂いて、これからの年祭というものは、本当に改めて重きに置きながらつとめさせて頂かなくちゃならないな、と改めて思わせて頂いている次第であります。新たな次の塚に向かっての新たな今度は百三十年祭に向かっての成人の歩みというものは、しっかりとした足取りで以てつとめさせて頂かなければならないなと思わせて頂く次第でございます。その当時の先生方、おつとめは命がけでつとめたというその思いを毎月毎月のおつとめには少しでも持たして頂けるようにつとめさせて頂きたいな、斯様に思わせて頂きます。

一人でも多くの方をおぢばに誘って帰らせて頂いて、教祖に、共々に御礼を申し上げさせて頂きたい斯様に思います。どうぞ一人でも多くの方、声をかけ、お誘い合わせておぢばにお帰り頂きますようにどうぞよろしくお願いを申し上げます。

そして、お帰り頂いて、共々に教祖にお喜び頂くと同時に、皆さん方共々に三年間よう頑張ったのうと、共々に年祭に向かっての歩みの労を労り合えれば、ありがたいなあと斯様に思わせて頂く次第でございます。

年祭は一日限り、と言うことで真柱様から仰って頂いております。年祭が終わったらもう今年も終わりかなあと、つい思いがちではございますが、それに当たりまして真柱様から、「年祭は一月二十六日限りだけれども、立教百六十九年は、年祭の年として教祖にお喜び頂けるように、一年間通しておぢがばが賑やかにしてもらいたい」と言うお声をかけて頂いております。本当にありがたい親心だなあと思わせて頂きます。つい年祭が済んだら、もうこれで済んだと思って、その肩の荷は下ろして頂いて結構だと思いますけれども、しかしながら成人の歩みというものは、年祭に向かってだけが成人の歩みではないんであって、日々確実な成人の歩みをさせて頂くと言うことは年祭に関わらずつとめさせて頂かなければならない角目だと言うことを考えてみれば、年祭が済めばやは

り、新たな塚に向かっての成人の歩みは、しっかりと歩み出さして頂かなければならないと言うのも確かでございますので、年祭に向けての肩の荷は下ろして頂いても、また、新たな成人の歩みと言うものは誓い合って、しっかりと歩み出しをさせて頂くということは大事だろうと思わせて頂きます。その上からしっかりと、また、年祭が済んでからも成人の歩みを進めてくれ、歩んでくれという親心だろうと思います。その思し召しにしっかりと添わさせて頂きたいと思います上から、また新たに大教会としては今年一年のスローガン、合い言葉を掲げさせて頂いて、また、実践項目も掲げさせて頂いてつとめさせて頂きたいと思います。

年祭が済んだ後は、年祭後のおぢばの姿、また、お道の姿はどうがったのかと言うことはしっかりと思案させて頂かなければならないと斯様に思うんであります。そういう上から、教祖伝第十章の「扉開いて」教祖御身をお隠し後のところから読ませて頂きたいと思います。

教祖は、午後二時頃つとめの了ると共に、眠るが如く現身をおかくしになった。時に、御年九十歳。

人々は、全く、立って居る大地が砕け、日月の光が消えて、この世が真っ暗になったように感じた。真実の親、長年の間、何ものにも替え難く慕い懐しんで来た教祖に別れて、身も心も消え失せんばかりに泣き悲しんだ。更に又、常々、百十五歳定命と教えられ、余人はいざ知らず、教祖は必ず百十五歳までお居で下さるものと、自らも信じ、人にも語って来たのみならず、今日は、こうしておつとめをさして頂いたのであるから、必ずや御守護を頂けるに違いないと、勇み切って居ただけに、全く驚愕し落胆した。人々は、皆うなだれて物を言う気力もなく、ひたすらに泣き悲しんで居たが、これではならじと気を取り直し、内蔵の二階で、飯降伊蔵を通してお指図を願うと、

さあ〳〵ろっくの地にする。皆々揃うたか〳〵。よう聞き分け。これまでに言うた事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。扉開いてろっくの地にしようか、扉閉めてろっくの地に。扉開いて、ろっくの地にしてくれ、と、言うたやないか。思うようにしてやった。さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。よう聞いて置け。と、お言葉があった。

さあ今から世界を平な地にする。今迄に言うた事は、実の箱に入れて置いたから、いよ〳〵親神がやしろの扉を開いて出たからには、総て現われて来る。子供可愛いばっかりに、その心の成人を促そうとて、まだこれから先二十五年ある命を縮めて、突然身をかくした。今からいよいよ、世界を駈け巡ってたすけをする。しっかり見て居よ。今迄とこれから先と、どう違うて来るか確り見て居よ。昨日、扉を開いて平な地に均そうか、扉を閉めて均そうか、と言うた時に、扉を開いて平な地に均してくれと、答えたではないか、親神は心通りに守護したのである。さあこれ迄から、子供にやりたいものもあった。なれど、思うように授ける事が出来なかった。これから先、だん〳〵にその理を渡そう。

このお諭しを聞いて、一同は、アッと思った。が、昨日答えた言葉を、今日言い直す事は出来ぬ。昨日お答え申上げた時の一同の心からすれば、姿をかくされようとは、全く思いもかけない事であった。しかしながら、姿をかくして後までも、生きて働かれると聞き、成程、左様であるか、教祖は、姿をかくして後までも、一列たすけのために、存命のまゝお働き下さるのか、それならば、と、一同の人々は漸く安堵の胸を撫で下ろした。

さあ〳〵これまで住んで居る。何処へも行てはせんで、何処へも行てはせんで、日々の道を見て思やんしてくれねばならん。

（明治二三・三・一七）

と書いてございますが、一時は教祖が御身をお隠しになられたその時には、ああ本当に世も終わりかと言うて、泣き悲しんだけれども、しかしながら教祖は姿を隠しただけで、この世に留まって、御魂はおぢばに留まって、今まで以上にたすけ一条に世界中を駆け巡るんだというお言葉を聞かせて頂いて、ああ成る程そうであったか、決して教祖はいなくなったんではない、むしろ私たち一人一人について一緒にたすけ一条の上にはたらいて下さるんだ、さあ勇んでこれからたすけ一条に歩むぞ、と言うて勇み立ったのが教祖御身お隠しあとのおぢばの姿なんであります。年祭を節目として、より勇んだ道の姿にならさせて頂かなければ、教祖年祭を迎えさせてもらったことにはならないと言うことを改めて心に置かせて頂いて、共々に年祭の年、意義あらしめる年にさせて頂きたい斯様に思わせて頂きます。

そういう上から真柱様のお言葉をそのままスローガンとさせて頂いて、一年間を通しておぢばを賑やかにしよう。とにかく一人でも多くの方、我が身もさることながら、一人でも多くの方をおぢばに誘って一回でも多くおぢばに帰らせて頂いて、教祖にお喜び頂こう、ということであります。その実践項目として、一つ、毎月一千人のおぢばがえり、毎月一千人以上はおぢばがえりさせてもらおうじゃないか、そうやっておぢばを少しでも笠岡の力で賑やかにさせて頂こうやないか、ということであります。そして、もう一つが、五十万軒にをいがけとおさづけの取次。五十万軒にをい

【6】善いことすると心いきいきよみがえる

ある統計によると、ボランティア活動をしている人は、免疫力がたかまり、長生きし、ボケない、という結果 が出たそうです。

だれでも、たとえ小さくとも親切行為をして、気分よくなった経験はおもちでしょう。人のために何かをする。喜ぶ姿を見る。自然と心さわやかになる。どの人にも、生来のやさしい心があるのですが、ただ表現するのが、チョッピリ苦手なだけなのです。

思いきって、まず一歩を。長寿社会に、免疫力増して、自分活性化を図ってみては。

がけは年祭までに掲げた百万軒とは、多少ニュアンスが違います。それこそ教祖年祭に向けての百万軒にをいがけは、なんでもどうでもせにゃならん。百万軒をどうでもみんなの力でにをいがけするんだ、というて歩んで来ましたけれども、その数を半分に減らしたというわけでは決してありません。やはり一人でも多くおぢばにお帰り頂くためには、多くにをいがけさせて頂くことは大切であります。にをいがけによって一回でも多くのおさづけをお取次出来るように、おたすけが出来るように、共々に今年一年つとめ切らせて頂きたい、斯様に思う次第であります。そうやっておつとめをさせて頂き、おさづけをお取次させて頂くことによって、確かに身上はご守護頂けますけれども、先ほど申しましたように、昔は本当に教祖におたすけ頂くには、おぢばに帰るしかなかった。おぢばに帰って教祖にたすけて頂くしかなかった。それが今は、教祖は世界中ではたらいて下さいます、おたすけは頂きます。本当の意味でのおたすけ、心身共におたすけを頂こうと思うたら、単なる身上だすけじゃなしに心身共におたすけ頂こうと思うたら、やはり、たすけて頂いたなら、ありがとうございますと言うて、先ずおぢばに帰って、教祖にお礼を申し上げて、教祖に直々お礼を申し上げさせて頂くことこそが、本当のおたすけ、心身共のおたすけということになるんではないんでしょうか。神殿だけで参拝を済ませている人がいる。それも悪いとは申しませんが、たすけて頂いたお礼を申し上げるならば、教祖のところにもちゃんと行かせて頂いて、教祖直々に、ああ、これとこれをご守護頂きました。ありがとうございます。おたすけの上にこのような鮮やかなご守護を見せて頂きました。ありがとうございましたと言うて、教祖のところにも今年はしっかりと親神様だけではなしに、教祖の教祖殿までしっかり行かせて頂いて、お礼を申し上げさせて頂ける今年は、おぢばがえりにさせて頂けたらありがたいなと斯様に思わせて頂く次第でございます。

年祭が済んだあとは、教祖にとにかくお喜び頂ける一年にするために、一人でも多くおぢばに帰らせて頂こう、よし、今年は楽しんでやらせて頂こう、と言う楽しみ心を以て、今年一年つとめさせて頂きたいと思います。

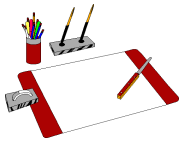
《以上要約》

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、
③俳句・和歌・川柳、④教会行事開催後の報告記事　等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
メール：**tenkasa@kcv.ne.jp**
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

談話室

年祭の想い出

神村分教会前会長　下田輝夫

土持ひのきしんでは藤井先生といつもコンビで、もっこに山盛り土を入れて周囲の人が驚く程の運び方をしたものです。当時は若かったせいか、そんな事をしても少しも疲れたと云う思いをした事がありませんでした。体は小さくても健康に恵まれ、喜寿を迎えた今日まで元気でお連れ通り頂いている事は、誠に有難く勿体ない限りで、日々感謝の気持一杯で通らせて頂いて居ります。当時ひのきしんの常連の方々も次々に出直され、今ではお会いする人も少なくなって参りましたが、忘れられないのは、現在玉島の詰所主任をして居られる岡本豊明先生です。年令も余り違わないので、お互いに元気を出し合いよく頑張ったものでした。八十年祭から私も大教会輸送掛の御命を頂き、玉島が分離される迄共に輸送掛としてつとめさせて頂き、随分御世話になり今に懇切にして頂いて居ります。直属ひのきしんから、青年会ひのきしん隊にも何回か参加させて頂きました。当時は直属ひのきしん隊、青年会ひのきしん隊の他に、半年以上長期にわたってつとめさせて頂く、常勤ひのきしんと、一ヶ月以上つとめさせて頂くひのきしん常備隊と云うのがありまして、常備隊には五十日余りつとめさせて頂き、御地場の姿が大きく変わる時に、色々な所で色々な体験をさせて頂きました。青年会ひのきしん隊では今はなくなりましたが、憩の家の東にありました教館(現在駐車場になっている)の南側に、婦人会本部と青年会本部がありまして、その青年会本部を宿舎として十日間つとめさせて頂きました。最初の時は今の北大路の新設工事でやかたの掘り方で出た土を、トロッコに積み込んで運ぶ作業でした。今頃ではブルドーザーやダンプカーですれば少々の工事はアッと云う間に出来ますが、当時はまだツルハシやスコップが主役の頃ですので、トロッコ一杯に土を積み込むのも中々大変でした。

当時としてはそれが当たり前でしたから、スコップを使う事は少しも苦痛とは思いませんでしたが、今から思えばよくやったものだナと思います。昭和二十九年九月二十一日から三十日まで青年会ひのきしん第二十五回隊でしたが、この時台風により青函連絡船洞爺丸が沈没すると云う大惨事がありました。二十六日だったと思います。私たちの班長さんが北海道小樽の方で、色々お話しを聞かせて頂き北海道をとても身近に感じていた矢先の事でしたので、忘れられない一つの大きな出来事です。考えてみますと二十六日と云う日には、時々大変な事が起こるナーと思います。余談になりますが、一月二十六日が文化財防火デーとなって居ますが、これは昭和二十四年一月二十六日法隆寺夢殿が火災で国宝の壁画が消失した事から、後になってこの日を文化財防火デーと定められました。この時は天理高校三年生の春季大祭に参拝している時に聞きましたのでよくおぼえて居ります。

《以下次回に》

こころの詩

田林　美智子

玉砂利に心も弾むご神苑
　自我を無にして一れつ祈る
初笑い大賑わいの幼たち
　帰りしのちの癒し七草
冴え返る　春手袋や水仙の
　薫りほのかに師を見舞う午后

▼一月二十六日朝の詩　　詩　かくしん

三年千日、仕切ってつとめた、朝が来た。
寒空に光かりさし、心おどりて、山陰、山陽
中国道、東へ東へ、笠岡詰所の、屋根かがやきて、
待ちに待ってた、教祖年祭。
中天に、太陽さんさんと、つとめ始まる。
地歌にしょうわする歌声高らか、
　たのしみづくめ、よろこびづくめ、
一手一つの、陽気づとめに、
　心いさんで、教祖百二十年祭。今ここに始まる。
明日に向かって、未来に向かって、
　いさめやいさめ、笠岡の友

◈教祖１２０年祭「学生おぢばがえり大会」迫る！！

全国から道につながる高校生･大学生らが親里に帰り集う　教祖１２０年祭　「学生おぢばがえり大会」が３月２８日（前夜祭は２７日夕づとめ終了後）開催されます。テーマは「世界の友に　をやの思いを」。学生会では「１万人」を、学生担当委員会では「全名称から学生の参加を」とお打ち出しいただいています。（大教会では１００名の参加を目指しています）大会まであと１ヵ月余り。一人でも多くの学生に、この旬におぢば帰りしてもらえますようお声がけをよろしくお願いします。

※「天理時報」（２月１９日号）に特集記事あり
　大会ホームページ　http://www.tsa120.com

◈鼓笛バンド講習会

【日　　時】　３月３１日（金）～４月２日（日）２泊３日
【内　　容】　お供え演奏曲（テーマソングが変わります）練習、修得。
　　お楽しみ行事（室内オリンピック等）。
＊４月２日は、少年会おつとめ総会へも参加します。

◈にをいがけ、おたすけ実修会（希望教会のみ）

【実施期間】　４月～６月
【内　　容】　教話、にをいがけ、ねりあい（今年の活動指針等）
　　その他、教会長と派遣要員と相談の上、実施してください。
【申 込 み】　３月２０日までに所定の用紙で申込み。

◈少年会笠岡団「おつとめまなび総会」

【日　　時】　平成１８年４月２日（日）午前９時受付、９時半開会、午後３時閉会
【内　　容】　午前　おつとめまなび、総会式典、若木門出式
　　午後　お楽しみ行事（ゲームなど）

【対　　象】　少年会員（幼児、小学生、中学生）・育成会員
【参加御供】　各隊　１，０００円
【服　　装】　ハッピ、学校のズボン、スカート、白い靴下。
　　なお、祭儀式をつとめる人はおつとめ着。

◎各隊からの少年会員が日頃のおつとめまなびの成果を、親神さま、おやさま、にご覧頂く年に一度の総会です。大勢の参加をお待ちしております。
会長さん、奥さん、この機会に「教会おとまり会」などで少年会員におつとめの大切さを教え、おつとめの練習をよろしくお願い致します。

◈婦人会　第８８回総会

【日　　時】　４月１９日　午前９時３０分
【期　　間】　本部中庭
【おつとめ】　式典に続き、会長様を芯に全委員部長が、殿内で御礼とお願いのおつとめをつとめる
【記念行事】　講演会
　日　時：４月１８日　午前５時～６時
　場　所：**第二食堂、第三食堂、東講堂**
　　東右一棟四階講堂（同時通訳）
　テーマ：「ご存命の教祖」

◈学生会おぢばがえり

＊大教会学生担当委員会では「おぢばを賑やかに」というこの旬の４月２２日～２３日に学生層を対象としたおぢばがえりを計画しています。２２日には“１３峠越え”、２３日にはおぢば管内の学生との“懇親会”（新入生歓迎会）といった内容を考えています。集合・解散時間、また参加御供など詳しいことは来月この紙面でお知らせいたします。大勢の参加をお待ちしています。

◈立教１６９年全教一斉ひのきしんデー

【期　　日】　平成１８年４月２９日（祝）
＊教祖１２０年祭の年の全教一斉ひのきしんデーに全よふぼくが家族ぐるみで参加し是非とも５０万人の達成を

◈縦の伝道講習会（ＫＯＧ１０万人増員の本部巡回を兼ねて）

【と　　き】　平成１８年５月２１日（日）祭典講話として
【講　　師】　岩　谷　富太郎　先生（少年会本部委員）
【内　　容】　こどもおぢばがえり、縦の伝道についての講話
【対　　象】　教会長夫妻、布教所長、隊育成委員長、ようぼく、信者

◈各行事に参加ご希望の方は、
各ブロックの担当者にお申し込みください

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には一列子供が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思召され　紋型ないところより道具を引き寄せ守護を教え八千八度の生れ替りをさせてこの世と人間をお創造下されたばかりでなく約束された年限の到来と共に教祖を月日の社としてこの世の表にお現われ下さり万いさいの元の理を明かされると共に陽気ぐらしに向かうひながたを御自らお通り下されました　私共は教祖からお口や筆又おたすけを通して御守護御慈愛の程をお聞かせ頂き喜びと感謝の念に包まれつつ日々は朝夕に御礼申し上げると共に御恩報じを念じつつ「世界一列救けたい」との思召に応えるべくたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております　中でも十年毎の成人の節目としてお与え頂いた教祖百二十年祭に向けては三年千日と仕切ってひながたを辿るべく成人の歩みを進めさせて頂いてまいりましたところその年祭もあと五日というところまでに至りました　おぢばではこの月二十六日に教祖百二十年祭が執り行われますがこの笠岡に於きましてもおぢばより理のお許しを戴いて今日只今からおつとめ奉仕者一同明治二十年の教祖御身お隠し当時に思いを致し勇んで座りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行なわせて頂きます

御前には厳しい寒さをものともせず今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が相共にお歌を唱和しつつ同じ思いに伏し拝む状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて教祖年祭には一人でも多くの声を掛け誘い合わせておぢばに帰らせて頂き教祖にもお喜び頂くと共にお互いの三年千日の歩みを称え合いたいと存じます　又年祭後の歩みの上について真柱様から「年祭の年として一年間を通しておぢばを賑やかにして貰いたい」との親心をかけて頂いておりますので笠岡ではその思いに応えさせて頂くべく「一年間を通しておぢばを賑やかにしよう」を合言葉に「一、毎月一千人のおぢば帰り」「一、五十万軒にをいがけとおさづけの取次」を実践項目として次の新たな塚に向かう成人の足取りとさせて頂く所存でございます

何卒親神様には元の親実の親と慕い思召に応える皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に自由の御守護を賜わると共に欲にきりない泥水の深みにまま〳〵はまり行く人々の心をたとえ僅かずつでも洗い清めて成人へとお導き頂きお望み下さる神人和楽の陽気づくめの世の状に一日も早く立て替えて下さいますよう一同と共に慎んでお願い申し上げます

実践項目集計(立教168年集計)

百万軒にをいがけ	726,654軒
おさづけのお取次	49,919回
身上事情お願い	9,424件

実践項目集計（12月）

百万軒にをいがけ	41,157軒
おさづけのお取次	2,938回
身上事情お願い	617件

大教会だより

◎教会長資格検定講習会修了者

前期　立教169年2月14日終講

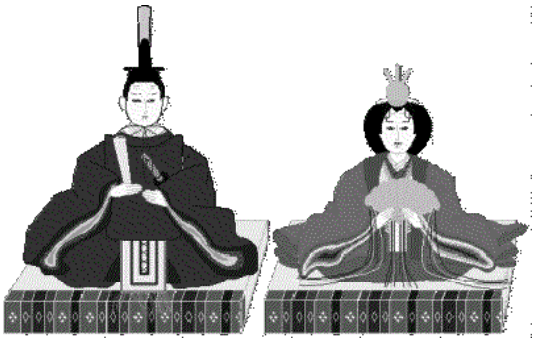
神邉　小坂　静宏

◎本部食堂ひのきしん

自　立教169年2月16日

至　立教169年2月28日

亀田山　山下　満



名言&迷言

昨年師走のある日、ある大手のスーパーへ買い物に出かけた。店内をブラブラするうちに、お節料理コーナーの前にやってきた。フト見るといつものことながら何千円台から、何十万円台まで、貧乏人にとっては異次元の世界である。福袋も又しかり、何万円何十万円何百万円まで。その位でビックリしなさんな。ついに一億円の福袋まで出現したという。まだまだ、それ位でびっくりしては話にならん。

何と、五万円のお節料理が出た。たったの五万円かと馬鹿にしなさんな。犬ですぞ。犬用のお節料理ですぞ。更にちゃんと福袋もあります。犬用の。我輩、その売り場の前でしばし佇む。人間も畜生も飽食の時代、まだまだこれから何が出てくるやら、どこまでいくやら。業者も業者なら買う方も買う方。

教祖は“菜の葉一枚でも粗末にしてくれるな”と仰った。

この狂気じみた日本丸という船は、太平洋のどこを漂流しているのだろうか。船の中にはあらゆる問題……事件、犯罪、汚職それらには、大きな問題ではあればある程、必ず国会議員という政治屋が絡んでいる。ドロドロとしたものを抱えたまゝ漂流している。いっそのこと、日本丸が沈没して新しく生まれ直した方が早いのかもしれない。

先日TVをみていたら、隕石が地球に衝突したらこうなる、という放送だった。直径一キロの隕石が太平洋に落ちた場合、地球は崩壊するという。それも又よし。親神様の鉄槌を喰らって又、新しい生命が生まれてきたらいい。人類の傲慢さに親神様の堪忍袋の緒が切れることも、あり得るだろう。　（か）

▽大教会某先生より聞きし話

――笠岡港の奇怪――

それは水微温ころから始まる。本来、南日本沿岸に生息しているエイ（体長1m程、菱形の海魚。食用として美味。尾は鋭く刺されると危険）が、なぜか群をなして瀬戸内海まで北上、笠岡港に集結するという。

それを待ちかねてか、若者達（なかには中高年も）が港目指して車を走らせる。

陽はとっぷりと西に沈み、月光が海面を仄な銀の色に染める。若者達は来客の背に恭しく乗り、そして合体。腰を振り、波動に身をまかせ波間を舵なき小舟のごとく漂っている。目は一様にうつろ。正に、人魚和楽の会場楽園がそこに広がっている。東の空が島々の間から白み始めるころ、港内は赤潮ならぬ乳白潮に変わっているという――。興味深い話だ。

▽新聞記者、見てきた様な記事を書く――という言葉があるらしい。人の話を聞いて、さも現場に行った様にリアルに表現する事など、物書のプロなら朝飯前だ。笠岡港の奇怪もどこまでが信実か定かではない。が、何らかの不思議な現象からの名発想、そして迷ストーリーへと展開させていく某先生のセンスは流石のものだ。

▽「私たちには教祖が50年にわたってお説き下された教えがあり、身をもってお示し下されたひながたがある」。私自身、見てきた様な人の信仰話ではなく、身を以てにをいがけ、おたすけの最前線にたち、御存命の教祖に少しでもお喜び頂ける様、つとめたい。教えに基づく本当の信仰者目指して――。　（よ）